『佐藤春夫と大逆事件』

山中千春［著］, 2016年, 論創社.

［評者］
有馬三冬
ARIMA Mifuyu

本書は，春夫の生地である紀州新宮の詳細なフィールドワークを行った著者が，「大逆事件」で処刑された大石誠之助の死を主軸とし，事件と春夫文学との影響関係を検証したものである．大逆事件とは，天皇暗殺計画，皇太子暗殺計画，官庁街占拠・皇居攻撃計画という3つの事件を主とした総称である．明治44年1月の判決で，事件に関わったとされる24名に死刑が言い渡され，うち6名が誠之助を含む新宮出身者であった．恩赦によって半数が減刑され，この「紀州・新宮グループ」の4名は無期懲役となったが，誠之助と成石平四郎は絞首刑に処された．社会主義的な思潮が盛んであった新宮は，事件策謀の地として弾圧されることとなるのだが，この一連の事件が春夫の初期作品「愚者の死」（詩），「美しい町」（短編小説）に濃い影を落としていることを，本書は明らかにしていく．以下，本書の要約である．

「第1章 大逆事件の衝撃」では，誠之助の死について直接的に触れた作品である「愚者の死」を取り上げ，この詩の解釈を通し，春夫の大逆事件に対する姿勢を探っている．従来の見方では，詩の表現を反語として捉え，誠之助の死を悼み国家権力に反発する詩と解釈するが，一方で字義通りに解釈し，誠之助に批判的な詩であるとする反論もある．著者は，この正反対の解釈が生まれる理由として，反語が徹底されていないという技術的要因を挙げ，「愚者の死」を「諷刺」という見方から解釈していく．学生時代から，社会主義者たちと交流を持ち，彼らの講演会の前座として持論を展開していた春夫は，危険思想を持つ者として当局から目をつけられていた．そのため，彼は故郷での生活に危機感を持ち，生田長江を頼って上京することとなる．この故郷からの「疎外」を鍵として，著者は「愚者の死」を読み解く．「愚者の死」の「愚者」とは，誠之助を指すのと同時に，春夫自身のことでもあるという．「多数者の規約」に従わない誠之助は殺され，春夫は故郷を追放される．しかし，「国家」の目から見た春夫という「個人」は，「紀州新宮」に収斂する存在でしかなく，「紀州新宮」もまた「国家」の脅威に戦慄している．ここに生じる重層的な権力関係と矛盾

を著者は指摘し，精神的地盤を失った春夫の危機が表象されているのだと結論づけている．

「第2章 大逆事件後における佐藤春夫の近代批判」では，大逆事件後に書かれた明治期の作品を取り上げ，春夫がいかにして精神的危機を克服し，時代・社会と向き合っていったのかについて考察している．事件後の春夫は，社会問題を主題とした〈傾向詩〉という手法を表現形式の１つとして用いている．春夫の社会状況への関心は強まっていくが，大正２年を最後に〈傾向詩〉は作られなくなり，代わりに評論という形式で社会問題を扱っていくようになる．明治44年に発表された「『日本人脱却論』の序論」は，ニーチェの『ツアラトウストラ（ツァラトゥストラ）』から大いに影響を受け，「愚者の死」で描かれた「日本人ならざるもの」（「愚者」の言い換え）と「超人」を結びつけている．つまり，ここで展開されるのは，保守的な旧い価値観に支配された「日本人」への痛烈な批判であり，「日本人」（国民）か「日本人ならざるもの」（非国民）かという非常にきわどい問題意識の提示なのである．このように，「日本人」が否定的に描かれ，「日本人ならざるもの」が「超人」とされていることは，「愚者の詩」を書いた春夫が誠之助に肯定的であったという証左と見なすことができる．同時に，「愚者＝春夫」を想定するならば，精神的危機に立たされた春夫は，多数派に疎外される自身を「超人」と見なすことで，これを克服しようと試みたのだと考えられる．

「第3章〈美しい町〉のユートピア」では，大正期の作品である「美しい町」を取り上げている．ここでは，春夫がユートピアへの憧れ自体は持っていたにも関わらず，なぜ単純にそれを描くのではなく，現実のレベルでユートピアを崩壊させることで，ユートピア譚の否定を描いたのかという問題意識から論を展開している．「美しい町」は，春夫の代表作「田園の憂鬱」と同様に，改題と改稿が繰り返された作品である．初出は大正８年の『改造』であり，ちょうどデモクラシー運動の最盛期にあたっていた．この頃，現実の中に理想的な村を作ろうとするユートピア志向も高まっており，この「美しい町」もその機運の中に位置づけられてきた作品である．しかし，著者はその「ユートピア志向」の文脈とは異なる視点から考察を進める．著者はまず，作中で触れられる司馬江漢やホイッスラーの絵画芸術を分析しながら，春夫の形成した〈美しい町〉という美的空間の革新性に言及する．さらに，春夫の思い描くユートピアとは，金銭的な価値観からの解放が前提としてあり，〈美しい町〉の発案者・川崎禎蔵の提示する条件によって，〈美しい町〉から現実的な猥雑さが徹底的に排除されていることを指摘する．このように，「美しい町」に描かれるユートピアは，現実世界と対照的な「芸術の境土」として創造されている．結局，金銭的

問題で〈美しい町〉計画が頓挫する様は，「現実」と「芸術」の対置を踏まえると皮肉な展開である．また，春夫はデモクラシーの風潮を「富国強兵」と変わらないものと見なして軽蔑しており，人々の精神的な転換を望んでいた．このことから，世間の熱狂するユートピア志向に対しても，春夫は一定の距離を保っていると考えられる．「美しい町」に描かれる現実レベルのユートピアの崩壊とは，春夫にとって到達不可能な芸術境の表象であり，同時にユートピア志向に対するアイロニカルな姿勢であったといえる．

「第4章 大逆事件の痕跡，ユートピアの母胎」では，「美しい町」の川崎のモデルを探ることから，大逆事件後の春夫の人間関係について言及している．先行研究において，川崎のモデルとして挙げられているのは，誠之助の甥である西村伊作，甘粕事件で殺害されるアナキストの大杉栄などである．著者はそこに加え，さらなる要素として，誠之助，誠之助の兄・余平，そして誠之助の甥・七分の3人を挙げている．大石余平とは，新宮においてキリスト教の布教活動を行い，文化的近代化を進めた第一人者である．この活動は弟の誠之助に引き継がれ，大石一族は新宮において西洋の思想や文化の浸透を推し進めた．ここにも，ある種の新宮の特殊性が垣間見える．イエスの理想主義的思想に強く共感し，「美しく，楽しい国を造ろう」と試みた大石兄弟のユートピア志向に，著者は「美しい町」の原型を見出している．彼らの試みは大逆事件で頓挫することとなり，その衝撃が「美しい町」におけるユートピアの崩壊として描かれているとも考えられる．また，誠之助の甥である大石七分は，芸術家として大成はしなかったものの，伊作から芸術的才能を高く評価され，春夫も自宅の設計を依頼している．身近な存在であった誠之助や大杉栄の死，執拗な思想弾圧に耐えかねて，彼は死ぬまで精神疾患を抱えていた．彼もまた，広い意味では大逆事件の犠牲者であるといえる．著者は，公に認められることのなかったこの芸術家もまた，〈美しい町〉を実現することのできなかった川崎のモデルの1人ではないかと指摘し，「美しい町」という作品の中に生きる大石一族の思想的影響を示している．

以上が本書の内容である．佐藤春夫といえば「田園の憂鬱」を取り上げられることが多い中，本書はほとんど注目されることのなかった春夫の初期作品，とりわけ明治期の詩や評論に言及している点で，新規性のある研究であるといえる．また，春夫文学において，直接的に触れられることのない大逆事件というものが，初期の春夫の文学的表現に対していかに影響を持っていたのかが明確に示されている．確かに，「紀州新宮」という土地の負うこととなった「差別」や「抑圧」を，春夫は正面から描かなかった．春夫と同郷の中上健次は，この態度を「転向」と批判する．しかし，

本書はそのような解釈に対して真っ向から異議を申し立てている．思想弾圧や検閲の厳しい状況下で，春夫の模索していく表現の根底には，常に大逆事件の存在が意識されている．大逆事件の衝撃は，春夫の文学者としての自己形成に大きな影響を与えたことは間違いない．しかし，ここで示された「国家権力」への反発心が，いかにして第2次世界大戦期の戦争称揚へと結びついていくのかは，改めて問題として突きつけられることになるだろう．「大逆事件」という観点は，まだ研究の進んでいない佐藤春夫文学において，引き続き重要な意味を持つように思われる．

Beyond Boundaries: Comparative Civilizations Now 19 (Feb. 2019)
Copyright © The Comparative Civilizations Society of Rikkyo University